

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24530955

研究課題名(和文)「文検」修身科の研究

研究課題名(英文) A Study of the Secondary School Teacher Certificate Examination in Moral Education

研究代表者

船寄 俊雄 (FUNAKI, Toshio)

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：40181432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：「文検」は、戦前期日本において、独学者が中等教員になるための検定試験であった。本研究は、その「修身科」に着目する。「修身科」は戦前期中等教育の基幹科目のひとつであり、今日の「道德教育」に相当するものである。本研究では、「文検」修身科の全体像が明らかにされた。本研究は、以下の五つの手順を踏んだ。(1)その通史を概観した。(2)試験問題の特質を明らかにした。(3)試験委員の学説と試験問題との相関を考察した。(4)受験生のライフヒストリー(受験動機、受験生活、受験後のキャリアなど)を明らかにした。(5)教科書の分析から、中等修身科教育の特質を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：“Bunken” is the certificate examination for autodidacts to become secondary school teachers in prewar Japan. This study focuses on its “Shushin-ka”. “Shushin-ka”, which was one of the main subjects in prewar secondary schools, is equivalent to today’s “Moral education”. In this study, the complete view of “Bunken Shushin-ka” was revealed. This study went through the following five procedures. (1) Its history was overviewed. (2) Characteristics of examination questions were clarified. (3) Relationships between the doctrine of examiners and examination questions were investigated. (4) Life histories of examinees (their motives to take the examination, their preparation for the examination, their lives after passing the examination) were elucidated. (5) Characteristics of secondary “Shushin-ka” education were clarified by analyses of “Shushin-ka” textbooks.

研究分野：日本教育史・教育学

キーワード：「文検」修身科 中等修身 友枝高彦 吉田静致 深作安文 宇野哲人 『文検世界』 『文検受験生』 『教育修身研究』

1. 研究開始当初の背景

1) 着想に至った経緯

「文検」とは、「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」の略称のことであり、1885(明治18)年に制度が創始され1949(昭和24)年まで存続した中等教員養成制度である。

「文検」については、『文検』の姿が見えてきた(吉田文『文検』試験問題の研究 - 戦前中等教員に期待された専門・教職教養と学習を読んで』、『日本教育史研究』第23号、2004年、105頁)と評されたように、ここ10数年の間に研究の成果が認められるようになった。研究を推進したのは、寺崎昌男と寺崎が組織した「文検」研究会であるが、同研究会は分析に未着手の多くの学科目を残したまま活動を休止した。

未着手の学科目の中で、なぜ「修身科」なのか。それには二つの理由がある。一つは、中等教育現場における修身教育(以下、「中等修身」と略す)の実態および歴史的な性格を解明したいということである。例えば、教育勅語に集約された理念を修身教育として教授した小学校と、「修身科」の背後にある哲学・倫理学の研究を教育した大学の間に位置する「半ば学問、半ば教育」といわれる旧制中学校において、修身教育はどのように行われたのであろうか。それは他の校種(高等女学校や師範学校や実業学校)と同じだったのであろうか、どのように異なっていたのだらうかというような疑問に対し、残念ながら教育学界は解答を持ちあわせていないのである。

いま一つの理由は、研究代表者の研究環境を生かしたいということである。「文検」修身科の研究が空白状態であることに、研究代表者は10数年前から気づいており、かつて財団法人上廣倫理財団から研究助成を得て研究を行った実績がある(平成9年度)。研究期間が1年間で助成金額50万円という小規模の研究助成であったが、その折りに、「文検」修身科の試験問題の復元や試験委員の主要著作や受験用参考書の収集などを行い、資料整備が一定進んだ。また、研究代表者の研究室には、「文検」研究会の活動の間に収集した「文検」受験者用雑誌である『文検世界』『文検受験生』がかなりの分量所蔵されているし、『教育修身研究』も一定程度の分量が所蔵されている。それらの資料を有効に活用するとともに、さらなる資料の整備を図りたいと考えた。

2) 本研究に関する国内・国外の研究動向および位置づけ

「文検」研究開拓の必要性をいち早く示唆したのは寺崎昌男であった。寺崎は、1986年に「文検」研究会を組織して研究に着手し、

その成果が『「文検」の研究』(学文社)として1997年に公刊された。同書が「教科」のみを対象としていた限界を超えるために、研究メンバーを拡充し、研究を継続し、研究成果の第2弾として『「文検」試験問題の研究』(学文社)が2003年に公刊された。同書は「英語科」「数学科」「歴史科」「家事及裁縫科」「公民科」を取り上げ、広範に「文検」の検討を行った。なお、2009年に井上えり子『「文検」家事科の研究』(学文社)が、2016年には古川修『「文検」体操科の研究』(世音社)が公刊され、2017年には亀澤朋恵『「文検」図画科の研究』(博士学位論文)が神戸大学学術成果リポジトリにて公開されている。

同研究会はその後休止状態にあるが、中等教育の基幹に位置していた「修身科」、最大の受験者数を抱えていたと思われる「国語及漢文科」「独語」「仏語」などの語学系学科目、「物理科」「化学科」「博物科」など自然科学系学科目、さらには「手工科」「音楽科」「習字科」など実技系学科目の分析が残されている。

3) 本研究の学術的な特色・独創的な点

「文検」修身科は本来中等教員養成の仕組みであり、それを解明することも研究の目的であるが、それにとどまらず、「文検」修身科を哲学・倫理学研究(試験委員の大学という場における研究)、「文検」修身科の試験問題(国家検定試験という枠内で問われる哲学・倫理学)、受験生の受験動機(中等教員の社会的地位獲得という上昇志向性、教員資質の向上意欲など)の三者の結節点としてとらえ分析する点に、特色と独創性がある。その研究成果は、教育学研究に大きな貢献をするとともに、哲学・倫理学の研究にも波及効果が期待できる。

2. 研究の目的

本研究は、「文検」修身科の全体像を明らかにすることを目的とする。具体的には制度の開始(1885年)から終焉(1949年)までの全期間を対象に、「文検」修身科の制度、試験委員、試験問題、受験者などについて解明することである。

3. 研究の方法

次の五つの側面から作業を行い、「文検」修身科の全体像に迫った。

(1) 制度史の解明

- ・試験実施に関する法令の整理、試験日程の整理。
- ・受験者統計の整理。
- ・合格者氏名一覧の作成。

(2) 試験問題の分析

- ・受験雑誌掲載の試験問題分析欄の分析。
- ・受験雑誌掲載の合格体験記の分析。

- ・受験雑誌掲載の模擬試験欄の分析。
- (3) 試験委員の分析
 - ・試験委員名の確定。
 - ・試験委員の著作の収集と分析。
 - ・受験雑誌掲載の試験委員の言説分析。
- (4) 受験者の分析
 - ・受験動機、キャリア、受験生活の実態。
 - ・合格後の進路の解明。
- (5) 中等修身の実態分析
 - ・修身教科書の収集と分析。分析にあたっては、中学校・高等女学校・師範学校・実業学校の共通性と異質性を意識する必要がある。
 - ・中等修身に関する言説の収集と分析。とりわけ授業を受けた生徒自身の言説の収集に留意する必要がある。

4. 研究成果

1) 概要

いま述べた「3. 研究方法」の(1)(2)(3)(4)については、史料の収集に膨大な時間がかかったが、ほぼそのすべてを収集することができた。

とりわけ(3)の試験委員の分析については、長く試験委員を務めた友枝高彦、吉田静致、深作安文、宇野哲人の4名の著作をかなり細かいものまで収集することができた。それら試験委員の学問内容と試験問題の間にはかなりの相関関係が見られるものの、その関係を深く掘り下げるところまでは至っておらず、今後の課題として残っている。

(4)の受験者の分析については、受験雑誌に掲載された合格体験記をほとんど収集することができた。とくに、文検受験のための専門雑誌である『文検世界』と『教育修身研究』についてはほぼ全冊揃えることができた。しかしその分析にあたっては、とりわけ昭和戦前期の史料が大量にあることと、分析の前提となる日本思想史の研究が遅れ、まとまった見解を発表するに至っていない。

(5)については、戦前の中等教育諸学校(中学校、高等女学校、師範学校、実業学校)の修身教科書のコレクションとしてはかなりの量を収集することができた。しかし、戦前に発行されていた総数からいえばまだ2割にも満たない分量であり、今後さらに収集を続けていく必要がある。

2) 試験問題の分析

(1) 大まかな出題傾向

ここでは、明治末期から昭和戦前初期までに出版された試験問題についてみてみるならば、大まかに 補足的傾向、 検証的傾向、 時事的傾向、 重複的傾向の4点が指摘できる。の補足的傾向とは、予備試験の問題に対して本試験の問題が、本試験筆記の問題に対して本試験口述の問題がそれぞれ一種

の補足的関係を持っている傾向をいう。

の検証的傾向とは、予備試験における解答を本試験において、また本試験筆記における解答を口述試験において確かめようとせんがために出題されていることである。

の時事的傾向とは、時事的問題が出題されていることである。

の重複的傾向とは、同趣旨の問題が繰り返し出題されていることである。

(2) 領域別出題とその内容

この時期になると、試験問題の出題の範囲は、ほぼ 倫理学、 西洋倫理史、 東洋倫理史、 日本倫理史、 国民道徳、 実践倫理の6領域であった。出題数は本試験では毎年6問であったが、それがこの6領域に重なっていた。

富田義雄『一ケ年必勝文検修身科の指導』(日本教育学会、1931年)によれば、その領域ごとに主要な参考書が次のように紹介されている。

倫理学概論	荻原拓『倫理学綱要』
西洋倫理史	中島力造『倫理学説十回講義』
東洋倫理史	宇野哲人『支那哲学史講話』
日本倫理史	井上哲次郎『日本朱子学派の哲学』
	井上哲次郎『日本陽明学派の哲学』
	井上哲次郎『日本古学派の哲学』
	三浦藤作『日本倫理学史』
国民道徳	井上哲次郎『国民道徳論』
教案	友枝高彦『師範教育』3・4・5

これら主要な参考書と試験問題を対照してみると、試験問題の出題に関し特徴的な事柄が二つ読み取れる。一つは、出題が特定の部分に片寄っていたことである。例えば日本倫理史でいうと、中江藤樹、山鹿素行、山崎闇斎、伊藤仁斎、徂徠の倫理説に集中しており、徳川時代の朱子学派、陽明学派、古学派の代表的人物の倫理思想を知っておればよかった。

いま一つは、類似の問題が繰り返し出題されていることである。倫理学概論について言えば、倫理学上の権利・義務の関係を問うものが繰り返し出題されている。この問題は人格の本質に係わる重要な問題であって、「人格の尊重すべき理由を説明せよ」(22回予備試験)、「人格と権利との関係如何」(53回口述試験)、「権利の意義」(36回、53回口述試験)と言ったような設問として頻出している。また、富田が「カントの合理説、功利説、自我実現説の三者は各理性説感性説及両者の調和説を代表する倫理学説の三大部分である。これ等の部分は受験者にとっては常識程度にこなされて居なければならない部分で

ある」(富田義雄『一ヶ年必勝文検修身科の指導』日本教育学会、1931年、145頁)と述べているように、これらの知識は、戦前の中
等教員がもつべき倫理学の概論的教養のスタンダードであった。

3) 試験委員の人と思想

六つの領域の出題者はほぼ確定でき、次のようなことであった。

第1問	倫理学	吉田静致
第2問	西洋倫理学史	吉田静致
第3問	国民道徳	深作安文
第4問	日本倫理学史	深作安文
第5問	支那倫理学史	宇野哲人
第6問	実践倫理・修身教育	友枝高彦

4) 「文検」修身科の歴史的特質

先に述べたように、検討すべき課題が膨大であり、まとまった研究成果をまだ出せない状況にあるが、現段階でのまとめを行っておこう。まず第1に、この試験はあくまで筆記を中心とする試験制度であったということである。したがって、正解に向けての一定の学習範囲と水準が存在した。平たくいえば、試験の「ヤマ」が存在した。ある合格者が、解答にあたって「二番は三浦藤作氏と吉田博士の倫理学史講義、荻原拓氏の倫理概論等でまとめ、四番は三浦藤作氏日本倫理学史に依つて書いた、五番は宇野博士の支那哲学史講話、大学講義に依り、三番は深作博士の国民道徳要義に依り、六番は友枝教授の師範修身四五の二冊と啓文社の教案提要及び修身問題解答等で作り、一番は吉田博士の道徳の原理を中心に演義、概論等を総合して解答した」(『文検教育・修身科独学受験法』(日本教育学会、1931年、306頁)と述べているように、受験生の独創的な学識を試す試験ではなかったということである。したがって試験委員の吉田静致は、「研究が徹底的でない」と云ふ、勉強の態度そのものに、根本的欠陥がある……いろいろ便利なものが出来る為に自然にこれにたよる様になり、……答案のこうしきと云つた様なものを暗記する消極的な勉強方法は断然廃すべきであります。……研究には独創的な処がなければなりません」(同前書、287~288頁)と述べているが、富田は宇野哲人の著書『支那哲学史講話』について、「学的研究として世に公にされた書として本書もかなり文検的には不用の部分を含んでゐる」と述べ、あくまで試験制度であることを受験生たちに強調したのであった(『一ヶ年必勝文検修身科の指導』大同館書店、1931年、203頁)。

第2に、いま述べたことと矛盾するようであるが、合格するためにはたんなるハウツー的な受験勉強で合格できるような試験ではなく、試験委員の著書を中心にかなり詠み込

まないと合格できない試験であったことであり、その点ではかなり内容的に深い理解を必要とする研究的な側面を有した試験であったことである。試験委員の深作安文は「正確なる知識」を受験生に求めたが、それは知識の暗記を勧めたのではなかった。すなわち「学術の研究に於て、打算的の態度」ではなく、「学そのものに深き関心をもつて準備もし研究もする」必要性を述べたのであった(『文検教育・修身科独学受験法』日本教育学会、1931年、290~292頁)。

また、試験委員たちは、自分たちの著作だけでなく、さらにそれら著作の原著にまで逆上って研究することを勧めたのであり、その点ではかなり研究的な手続きを受験生たちに求めたのであった。

第3は、「文検」修身科が中等教育諸学校の修身科教員の供給制度であったことは間違いないけれども、受験生の側から見た場合、それ以上に人格修養としての意味を持っていたことである。

第4は、中等教員への進出以外の意味を「文検」修身科が持つようになったということは、受験動機が受験生にとってより内在化したことを意味することである。言い換えれば、受験生の多くを占めた小学校教員にとっては、「文検」の受験は自主的な研修の意味合いを持っていたということである。

最後に指摘しておきたい特質は、「文検」修身科が、近代日本における倫理学説の重要な伝播のルートであったことである。受験生向けの多くの手引書は、試験委員の著作を中心参考書として推薦し、その精読を勧めた。それは確かに合格への近道を受験生たちに教えるものであったが、同時にアカデミズムの頂点に位置する学者たちの学説を学ぶことでもあった。「文検」の受験生たちは、帝国大学や高等師範学校という試験委員たちの勤務先の学生たちよりも熱心で、人数的にもはるかに多く重要な聴衆であった。言い換えれば、アカデミズムの頂点で作られた学説は、「文検」を通じて国民に伝播・普及していったということである。まさに「学問における『見えざるパラダイム』ないし『カゲの通説』を「文検」が形成したのであった(日本教育学会教師教育に関する研究委員会編『教師教育の課題』明治図書、1983年、354頁)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

船寄 俊雄(FUNAKI Toshio)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科
・教授

研究者番号：40181432